



美術史学専修

美術史学専修では、絵画、彫刻、工芸はもとより、写真や映像、建築や庭園など、あらゆる「イメージ」を研究対象としています。作品の様式や意味についての研究、制作の背景や受容の歴史を考える研究など、その手法はさまざまです。ただし、特定の思想や先入観にひきずられることなく、あくまで作品的確かな観察に基づいた実証的研究をめざしています。

美術史学専修は、日本・東洋美術史と西洋美術史の二つの専門分野に分かれています。教授、准教授あわせて5名の専任スタッフに加え、大阪大学総合学術博物館の教授1名が芸術史講座のスタッフを兼任し、6名が幅広い授業を開講しています。日本の大学では、最も充実した体制を持つ美術史研究室の一つです。

隣接の美学・文芸学、音楽学・演劇学専修、あるいは歴史や文学など他分野との連携や、海外の研究者との交流も積極的に行っています。近年はコンピュータによる画像データベースの作成、画像処理などにも力を入れています。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/arhistory/tobi/tobifront.htm>
(東洋美術史)

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/arhistory/seibi/seibifront.html>
(西洋美術史)

教員

囿府寺 司 教授	こうでら・つかさ
橋爪節也 教授	はしづめ・せつや
藤岡 穰 教授	ふじおか・ゆたか
岡田裕成 教授	おかだ・ひろしげ
桑木野幸司 教授	くわきの・こうじ
門脇むつみ 准教授	かどわき・むつみ



どんな授業があるの？

[講義題目]

- 近代美術と大阪
- 中国の仏教石窟寺院
- 16世紀美術の図像解読術
- 近現代美術文献講読

[演習題目]

- 見学演習（美術館・寺社など実地見学）
- 仏教美術史料講読
- 西洋美術史 研究発表と討論
- 建築・庭園見学演習

何を学んでいるの？

日本・東洋美術史

日本とアジアの美術の歴史を学びます。教員の専門は仏教美術、日本近世絵画、近代美術ですが、学生の研究テーマは自由！

西洋美術史

日伝統的な「西洋」の線引きにこだわってはいません。「美術」の枠のとらえ方も。驚くようなテーマに挑戦してみてください。

教員が選ぶ印象に残った卒業論文

谷文晁筆『公余探勝図』に就いて

寛政五年三月の伊豆は曇。「記憶」を揺さぶる絵画としての評価に挑む著者の粘り強い考証に、松平定信の巡検のリアルな追体験と文晁の意図が確認できて圧倒される。(選：橋爪節也 教授)

信貴山縁起絵巻に描かれる建築

信貴山縁起絵巻に繰り返し描かれる建物（長者宅、飛倉、信貴山の住房）に型を用いていることを発見し、その意味を考察。透明シートに各建物を描いた付録に感服。(選：藤岡 穰 教授)

試問の席でタマネギを刺むパフォーマンスをした人がいました（修論ですが）

追い込みで徹夜を重ね、提出後丸2日寝続けたという人も。卒業後の進路はそれぞれにせよ、自分の限界と向き合う機会にすれば、その後の人生の財産になるでしょう。(選：岡田裕成 教授)

叡智の戦い

論文の査読・試問は、ある種の知的バトルである。学生が数年かけて研究した成果を、教員が短期間で吟味し、意見をぶつけ合う。だからどの一本も真剣勝負。(選：桑木野幸司 教授)

[卒業論文題目]

- 蝦蟇仙人の図像とその表現について
- 鎌倉時代九相図の再検討：テキストとイメージをめぐって
- 河原温《印刷絵画》と戦後美術の状況
- シャガールの磔刑図：《白い磔刑》
- 17世紀オランダ絵画における働く女性像
- マッキアイオーリと15世紀美術

直に作品に出会うことが第一！

東洋美術史 研究室 レポート

授業について

東美の講義では、古代東アジアの仏像や近世の日本画、近代大阪の美術史など幅広い時代とジャンルにわたって東洋美術史を学ぶことができます。演習では、見学演習の他に東洋美術史に関する文献や論文の講読演習も行います。また、論文作成演習では自身の卒業論文作成に向けた発表の他に先輩方の発表を聴くこともでき、新しい作品や芸術家の魅力に出会えます。(4年Mさん)

見学演習

毎週金曜日の見学演習では、丸1日を使って近畿地方の展覧会や社寺に足を運びます。実際にさまざまな作品に触れることで観察眼を養えるいい機会です。学芸員の方や先生方から説明をしていただくこともあり、毎回新たな知見を得られる東美ならではの授業です。(4年Iさん)

研究室旅行

本研究室では、毎年研究室旅行が行なわれています。今年度は、鳥取・島根へと足を運び、鳥取砂丘や三徳山三仏寺、足立美術館などを見学しました。普段、写

真でしか見るのできない作品や現地の文化に触れる、貴重な体験の場であるとともに、先生方や研究室の先輩方との親睦を深める素晴らしい機会にもなっています。(4年Tさん)

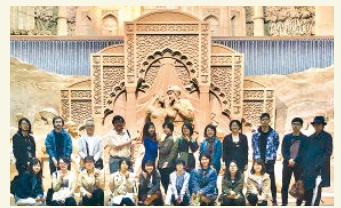
研究室の雰囲気

先輩・教員の方々が、後輩に対してよく声をかけてくださるので、先輩・後輩、教員・学生の隔たりなく、お話がしやすい雰囲気です。授業や研究において参考になる本などについての質問も丁寧に答えてくださいます。他にも、私の個人的な意見ですが、食へのこだわりがある方々が多いです。その方々が選ぶお菓子とお茶に彩られた研究室でのティータイムは非常に楽しいひと時です。(4年Hさん)



東美を選んだ理由

高校時代から日本史が好きだったので、日本史関連の専修にしようと考えていました。幅広く授業を受けてみた後に、私は日本史の中でも特に美術に興味があるのだと自覚しました。しかし最後に決め手となったのは研究室訪問です。先輩方から見学演習のお話などを伺ったのですが、研究室のやさしい雰囲気に惹かれました。(4年Yさん)



研究室旅行 鳥取・砂の美術館にて

「目を鍛える」授業が新鮮でした。

西洋美術史研究室に入った理由

★大学に入った当初は、特に西洋美術をやりたい訳ではありませんでした。興味を持ったきっかけは、西美の先生の講義でした。ポッティチェリの《春》などの絵画にも実は寓意的な意味が隠されていることを知り、「美術史って面白い」と思うようになりました。(修士1年Sさん)

★1年生の時に受けた授業の中でいちばん興味を惹かれた授業が「西洋の芸術」だったからです。ゴッホやフェルメールの本物の作品と偽物の作品の見分け、ルネサンス期とバロック期の作品の識別など「目を鍛える」内容が新鮮でした。また、ヒトラーが退廃芸術として数々の名作を迫害していた歴史もこの授業で知り、作品が現代まで残っている、私たちが美術館で観ることができるのがどれだけ尊いことか改めて気づかせてもらった点も大きかったです。(4年Oさん)

授業について

★専門の授業では、西洋美術に関する基礎知識を一から丁寧に教えてもらえます。また、ヨーロッパやアメリカ合衆国といっ

たいかにも「西洋」らしい地域の芸術だけでなく、中南米などの芸術についても教わることができるのも西美の魅力です。(修士1年Tさん)

★とにかく西美はカバーする分野が幅広いので、ゼミで他の人の発表を聴いているだけでも知識の幅が広がります。また、ディスカッションや質疑応答を通して自分の意見を言ったり、自分が思ってもいなかった発想を得たりすることで、日々刺激を受けています。(研究生Kさん)

西洋美術史研究室のいいところ

★先生方も先輩方もとても優しく、困ったときはすぐに助けてくれます。研究室はアットホームな雰囲気ですが、干渉しすぎないちょうどいい距離感です。(4年Aさん)

★やっぱり研究室旅行は楽しいです。今年の研究室旅行では研究室出身の学芸員さんの案内で美術館のバックヤードを見学させていただきました。普段はなかなか入ることのできない美術館

の裏側を見られるというのも、美術史学専修の特権ではないでしょうか。(3年Oさん)

大変だったこと

★留学生の私は、いわゆる横文字に苦労しました。日本語での読み方は母語での読み方とも原語での読み方とも微妙に異なるので、聞き取ったり発音したりするのがとても難しかったです。(修士2年Sさん)

西洋美術史 学生 インタビュー



研究室旅行 広島市現代美術館にて